まる福連携2025

異業種との対話から福祉を探る

一般社団法人福祉システム北海道
代表理事 髙橋 銀司氏
（社会福祉士、介護福祉士）

エピソード２　菓子製造業工場長　菊池　勝樹 氏

「安心・安全・清潔」の意識

きくち・まさき　1964年、北見市生まれ。半導体製造メーカーに就職し28年間勤めた後、2017年に「ほがじゃ」などの菓子製造を手掛けている福太郎小清水北陽工場に転職。入社に合わせて前職の赴任先である岩手県盛岡市から北海道に戻り、小清水町に移住。現在、同社で工場長・部長を務めている。

●菓子製造業のお仕事について教えていただいてもよろしいでしょうか。

当社は福岡に本社を構える山口油屋福太郎グループの１つで、菓子製造会社です。菓子販売を始めて23年が経(た)ち、福岡では代表的なお土産菓子の１つである「めんべい」が当社の前身です。その後、めんべいを製造して10年余りが経ち、北海道にも工場を設立することとなり、旧小学校を利活用した形で、現在は「ほがじゃ」というせんべいを製造しています。ほがじゃはめんべいを基本として作られたお菓子で、今でちょうど11年目に差し掛かっているところです。

●どちらもジャガイモでんぷんを使っていますよね。菊池さんはもともとお菓子が好きだったんですか。

普通です(笑)。もともと半導体の製造会社から、転職エージェントに紹介していただき、セカンドキャリアとして転職してきました。

●菓子製造業の工場長として大切にしていることを教えてください。

現在、従業員が50人超いるのですが、人が多いといろいろな考えがありますので、そこをまとめて同じ方向を向いて事業を営んでいくところがやはり大変ですね。コミュニケーションの方法は、口で伝えたり文章で伝えたりとさまざまです。文章や言葉で伝わらない部分は、現場リーダーや役職者が実践してみせるようにしています。行政やＪＡ等、外部の方々との関わりも大事にしています。地域の人に助けられて運営しています。

●工場長として働かれてきた中で失敗や苦労した経験などありますか。

失敗談というわけではないですが、マーケットの大きい札幌圏、新千歳空港のエリアは需要予測が非常に難しいです。新型コロナなどによって需要が減ったり、逆に売れすぎて欠品になるわけにはいかないので、需要に合わせた作り方というのが重要になります。必死に作らなきゃならない時は時間外労働をフルにかけて作って、店舗に欠品がないようにしていかなければならない。作り過ぎてしまうと処分するしかないですから、そういう意味では浮き沈みが激しいですね。引き取りがなかったり、需要が少なかったり、逆に伸びる時には必死にその需要に合わせないと、せっかく契約されている店舗、商社、問屋さんにご迷惑をかけてしまいますし、競合他社に変えられてしまいます。

●難しい業務には、どのようなものがありますか。

包装工程でいえば、安全安心にお客さんに食べていただけるように、異物が混入しないようにしなければなりません。夏になると食中毒の話を耳にします。どれだけ一生懸命に対策しても、必ず漏れや予想していない出来事が起きて、事件になっていたりするのかなと思います。本当に衛生面は常に気が抜けないです。

●改善して良くなった事例はありますか。

製造過程でどうしても規格外のものが出てしまいますが、それを減らしていく取り組みが上手(うま)くいっています。もともと規格外が１割くらい出ていたのですが、ここ４年くらいで今は２、３％という水準にまでもっていきました。それは製法を少し変えてみたり、カットアンドトライでやっていますね。

●日々の仕事の中で、福祉や介護を感じる時はありますか。

小清水町社会福祉協議会の就労支援の方にお仕事を手伝っていただいているんですよ。うちの工場まで来てもらって、従業員と同じく、せんべいの入っている化粧箱を作ってもらっています。もう６年くらいになりますかね。週２回４時間程度、２、３人に来ていただいています。

実際に来ていただいて、町社協のトップの方のお話を聞いたり、利用者さんに手伝ってもらったり、非常にありがたいと感じています。近隣地域の就労支援事業所からも体験させてほしいと声をかけてもらっています。数件、体験してもらった団体もあって、半日ほど当社の従業員と一緒に軽作業をしてもらうなど、こちらも社会経験をさせていただきました。

●工場長から見て、福祉や介護の業界はどう見えていますか。

正直、以前は関わりがなかったので意識することがなかったのですが、社協さんと関わるようになってから、社会の仕組みに不可欠だと意識するようになりました。利用者さんに仕事を体験してもらって、「あ、ちゃんとできるんですね」という驚きが始まりでした。そこから、もう少しこちらでも他の仕事にも広げられたらと思っているところです。

●菓子製造業のお仕事と福祉に共通する点はありますか。

当社は、かつてジャガイモでんぷんが不足した際に、会長が偶然、小清水町のでんぷん団子がギネスに認定されたという話を耳にし、「北海道の小清水にはでんぷんがたくさんあるのではないか？」と単身で飛び込んできた経緯があります。実際、当社の製品成分の約50～60％がでんぷんで、特にジャガイモの加工でんぷんの生産拠点が道内でもオホーツク圏に集中しています。当社では、そうしたストーリー性を大切にし、道産素材にこだわった製品をお届けしています。会長は「小清水のでんぷんを使わせてもらっている以上、この地域に恩返しをしなければならない」とよく言っています。地域貢献はもちろん、雇用創出、廃校活用など、企業として社会に対して常に関わっていく姿勢が求められています。

福祉に関しても、福祉の職員さんが言っていたことですが、利用者さんには社会とのつながり、一員でいる喜び、やりがいが必要です。これは社会参加の一環として、私たちが目指すべき方向性と同じだと感じています。最終的に、誰のためにこの商品を作り、販売しているのかという視点も大切です。「１人ひとりのお客様のために」ではありますが、実際には、北海道小清水町のジャガイモを使ったでんぷんという部分にこだわりを持ちながら、より広い視点で社会貢献を考えています。

工場を案内する菊池さん

●菓子製造業として知ってもらいたいことはありますか。

食品衛生の部分で、いかに安全安心で清潔なものをお客様に届けるかというところが一番のキーポイントだと思っています。これは業界の者が共通して持っている意識だと思います。

●いろいろな知識、ノウハウはどのようにして得たのですか。

たまたま仕事が向いていたのかなと思います。前職とは畑違いのところに飛び込んでいきましたけど、覚悟と勇気を持って飛び込むしかないと思っています。

●ご自身で福祉や介護のサービスを使うとしたらどのようなサービスが良いですか。

自分自身が介護を受けている姿ってまだなかなかイメージできないのですが、親のことを考えると、社会との関わりについて考えます。介護サービスについて全然知識がないのですが、近所でデイサービスの車を見かけても敷居が高いように感じてしまいます。「自分で調べなければならないな」とは思いつつ、通いやすい場所があればいいなとも思います。

◇あとがき◇

障害のある方の就労支援先として、お菓子の化粧箱づくりを手伝ってもらっていると語る菊池さん。その言葉には「ありがたい」という感謝とともに、今では欠かせない戦力として受けとめていることが伝わってきました。

もともと半導体メーカーに勤めていた菊池さんは転職して現職に就き、菓子製造に携わっています。製造現場では「安心・安全・清潔」の意識を徹底し、従業員への配慮を怠らず、さらに北海道産原料へのこだわりを貫いています。そうした姿勢は工場の内外にとどまらず、地域とのつながりにも及びます。「地域の人に助けられている」という実感が、日々の仕事を支える原動力になっているのでしょう。

印象的だったのは「お菓子を食べること自体は好きでも嫌いでもなく普通です」と答えてくださったこと。その飾らないスタンスこそ、冷静に物事を判断し、工場長としてリーダーシップを発揮できる秘訣なのかもしれません。

◎インタビュアー◎

たかはし・ぎんじ　小清水町出身。Ezo'n music福祉ジャーナリスト。日本医療大学総合福祉学部助教。札幌市市民活動サポートセンター市民活動相談員。

○(まる)福連携プラス　YouTube配信中

インタビューの様子を動画で配信中。紙面に掲載しきれない内容を10分ほどの動画にまとめています。